

会いに行つてよかった

中部中・1 山本 結愛

引つ越してしまった友達がいる。小学校は違ったが、親同士が以前から親しくしていたこともあり、私たちも次第に仲良くなった。この友達とは話が合い、一緒にいると自分も明るい気持ちになれる。そのため、一緒に過ごす時間はとても充実していた。友達が引つ越したばかりのころはSNSを使って少しでもやり取りしていたが、徐々にお互いの生活も変わり、連絡する回数も自然と減ってしまった。話したい気持ちはあっても、何か用事があるわけでもなく、「今さらかな。」「今は忙しいかも」などと思つてしまい、連絡をしないままになっていった。今までより距離が遠くなってしまったことで、なかなか会えなくなってしまった。これにより、心の距離まで遠くなつてしまった気がした。これにより、心のどこかで「またすぐに会える」と思つていた気持ちは、時間が経つごとにどこか遠くへ行つてしまい、気がついたらもう数か月も連絡を取っていなかったのである。

そんな夏休みのある日、スマホを見ていたらこの友達から一通のメッセージが届いた。

「元気にしてる？」

画面に表示された名前を見た瞬間、心臓がドキッとして、スマホを持つ手が止まった。けれども、ずつときにかかつていた友達の名前だったこともあり、飛び上がるほどうれしくなった。ところが、すぐには返信できなかった。どのように返事をしたらいいいのかわからなかったからだ。「久しぶり」と言うだけでも、変に距離を感じさせてしまう気がしてならなかった。どんな言葉を返そうか悩んでいたとき、近くにいた母が

「どうしたの。」

と声をかけてくれた。自分の手元にあるスマホの画面を見せると、

「そんなにうれしそうな顔をするなら、今から会つてきたら。」と言われた。

「え、今から？」

と思わず聞き返してしまった。連絡を取り合いながら会う日にちを決めていけばよいのではないかと思つていたため、母のこの言葉に衝撃を受けた。そして、

「うれしい気持ち冷めないうちに、行動したほうがいいよ。」とまで言ってくれ、友達の住んでいるところまで車で送ってくれることになった。

その日の寝る前に、母との会話を思い出した。母が言っていたように、私はそんなにうれしそうな顔をしていたのだろうか。そんなに表情に表れていたのだろうか、と自分の知らなかった一面があることに驚いた。

正直なところ、友達に会いに行くことに不安があった。以前のように入話することができるようだろうか。気まづくなつてしまったらどうしようか。モヤモヤした気持ちでいっぱいだった。しかし、この気持ちよりも「会いたい」という気持ちの方が大きく、私は思い切つて彼女に会うために家を出た。

約束の場所で待っていると、少し遠くから私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。顔を上げると、懐かしい笑顔がこっちに手を振っていた。その瞬間、今まで悩んだことが不思議なくらい安堵の気持ちが込み上げた。「全然変わっていないな」と思つて、自然と笑顔になっていた。

久しぶりに会ったばかりのころは会話がぎこちなかったけれど、話し始めたらすぐに昔の私たちに戻れた。

「最近どう？新しい学校には慣れた？」

と彼女が聞いてくれた。私は思わず、

「全然、思っていたよりも課題が多くて大変だよ。」

と答えた。すると、

「こっちも同じだって！」

と笑いながら返してきて、その笑顔にほっとした。

「クラスの友達は優しいの？」

「勉強についていける？」

など、次々に質問し合い、お互いの近況を報告した。気がつけば、学校の先生の話やクラスで一緒に過ごしている友達の話、ちよつとした失敗談で盛り上がった。

「そういえば、前に好きって言ってたあの曲、まだ聴いてる？」

と聞かれた。あの曲とは、中学校へ入学する前に友達が教えてくれたガールズグループのアップテンポな曲だ。聴いてみると、歌詞や曲調が自分好みであったため、すぐにお気に入りの曲となった。

「もちろん！今もたくさん聴いてるよ。」

と勢いよく答えると、

「やっぱり、あの曲いいよね。」

と話し、友達と一緒に口ずさんだ。

この他にも、流行っていること、最近よくしていることなど、お互いに話題を出し合い、気づけば私たちの笑い声は止まらなかった。時間が足りないくらい、二人でたくさん話をしていた。

二人でたくさん話していたときのことを思い返すと、私はやはり彼女のことが大事な存在なのだとしみじみ感じた。何気ない会話や、ふとした笑い声に、以前と変わらない絆があるように思えた。友達と離れ離れになっても、時間が経っても、心の中ではしっかりとつながっているのだと気づいた。

帰り道、車の中で外を眺めながら、今日会いに行つてよかったと心から思った。ほんの少しの勇気と、母からの「今から会つてきたら？」という一言がなかったら、私は「久しぶり」のメッセージに、どのように返せばよいかわからず、きつと迷ったまま時間が経ち、

何も行動できずにいたかもしれない。あのとき、母が私の背中を押してくれたことで、この温かい気持ちにきづくことができた。だからこそ、あの一言は、私にとって大きな「きつかけ」となった。そして、母の行動力に驚かされたとともに、ありがたいとも思った。私が小さいころから「これをしたい」と相談すると、「やってみたら」と否定せず、すぐ受け入れてくれた。「後悔しないように」「思い立ったら即行動」など、母の姿から学ぶことが日々ある。母の姿を見て、私もまねていきたいとも思った。

今まで「大切な人」というのは、いつもそばにいて、毎日顔を合わせて、一緒に笑ったり悩んだりする人のことだと思っていた。しかし、今回のことを通して「それだけではない」ということに気づかされた。どれだけ会えなくても、「また会いたい」と思える人の存在も、きつと「大切な人」であるということを知ることができた。

あの日、一緒に過ごした時間は、本当にあつという間だった。名残惜しくて、帰りたくないと思うくらいであった。けれども、その気持ちがあることで、「また会いたい」というエネルギーになる気がした。

その後、以前と比べて少しだけ連絡する回数が増えた。たった一日会っただけなのに、心の距離がぐつと近くなった気がする。

あの日、本当に会いに行つてよかった。